

そうしてソコを唾液で十分に濡してから指に切り替え、もう片方の突起に舌先を移してチロチロと小刻みに舐め擦る。舌先と指を交互に使い、左右どちらにも丹念に触診を施すと、今度は突起を縁取る色素の濃い部分にぶちゅと吸い付くように唇を押し当てた。

「ひあっ……あ、アあ、ああん！」

口に含んだ突起をスポイトみたいにちゅっ、ちゅっとならぬと、時折髪を肌で擦り当てながら吸引を繰り返す。すると、流石に堪らなくなったのか、ディーノは一際切なげな喘ぎを漏らしながら、逃れるように体を振じらせ始めた。

「あまり動かないでください。ちゃんと診られないでしよう？」

窘めて、またチュウチュウと突起を吸い続けていると、ディーノが太腿辺りをモジモジさせながら切れ切れに訴えてきた。

「センセ、それ……擦った……ふあ、ア、あつ、アアッ!!」
「もう少し我慢してくださいよ、ディーノ先生。これは診察なんですから」

「も、無理………下の方もヘンになってきちゃってるし、我慢なんて、できねえよっ……」

言葉に釣られるように視線を下ろすと、こっちも診て、触つてと自己主張をする膨らみが目に入る。

スラックスを突き上げるほどに張り詰めているソコは苦しそうで。

時間もそんなにあるわけではないし、そろそろ薬にしてあげようか。

でも、もう少しだけこのシチュエーションを楽しんでいたくもある。

二つの思いの狭間でしばし悩んだ末、あとちょっとだけ……と決めて口を開いた。

「では次はそちらを診ますので、下着を下ろしてください」
「へ？ あ……は、はい、先生……」

脱がせてもらうのを期待していたのだろう。

ディーノは一瞬素に戻ってキョトンとした後、ポツと頬を染めながらあたふたとベルトに手を掛ける。

そしてスラックスの前を寛げて下着ごと一気にずり下げると、窮屈な場所から解放されたベニスガピン！ と元氣よく飛び跳ねてその姿を現した。

「これで、いいですか？」

恥じらいながらも腰骨を突き出し、「患部」をこちらの眼前に晒し出すディーノ。

そこは既に先走りか垂れ流れていて、赤く膨張し腹にピツタリと付く程に屹立しているソレをテラテラと光らせていた。

「これは相当腫れてますね……辛いでしょ」
「あっ……ん、っは……ハアあつ……」